



「経営戦略に資するIPランドスケープ実践ガイドブック」 を公表しました。

前・特許庁 総務部 企画調査課 特許戦略企画班
特許戦略企画係長 山崎 歩美

1. 背景

2017年頃にIPランドスケープが注目を集めて以来、様々な情報が発信されるようになり、IPランドスケープという言葉は広く使用されるようになっていきます。

特許庁では、令和2年度に特許庁産業財産権制度問題調査研究「経営戦略に資する知財情報分析・活用に関する調査研究」において、公開情報調査、アンケート調査、ヒアリング調査を通し、IPランドスケープの定義や活用場面等の実態を調査しました。調査により、IPランドスケープという言葉が、単なる情報分析と捉えられることもある一方で、先進的な活動を行う者が、経営戦略や事業戦略に資することを旨とし、様々な情報とともに知財情報を活用し、経営層や事業部門、研究部門等の各部門と分析・解析結果を共有しながら、経営や事業に資する何らかの解を得るべく取り組んでいる現状があることが分かりました。この結果から、IPランドスケープを「経営戦略又は事業戦略の立案に際し、経営・事業情報に知財情報を組み込んだ分析を実施し、その分析結果（現状の俯瞰・将来展望等）を経営者・事業責任者と共有すること」と定義付けました。

そして、現状、IPランドスケープの取組について、企業間での情報交換も行われています。しかしながら、IPランドスケープを実施する際には企業の機密情報を多く扱うことになることから、経営・事業・知財情報の具体的な分析観点や分析手法は明らかにされないことが多く、広く浸透しているとは言えない状況にあります。そこで、特許庁では、令和5年度、IPランドスケープの具体的手法に関する

調査研究を行いました。そして、その結果を、「経営戦略に資するIPランドスケープ実践ガイドブック」にまとめました。

2. ガイドブックの掲載内容

(1) IPランドスケープの目的と分析手法

IPランドスケープは様々な目的で活用されています。本ガイドブックでは、13の目的を整理しています。

また、目的に対してどのような分析を行うかは、業界や取得可能な情報に応じて様々であり、一意に定めることはできません。しかしながら、分析過程を詳細に見てみると、複数の分析手法に細分化することができます。本ガイドブックでは、15の主要な分析手法を抽出し、目的に応じて、どの分析手法が活用できるかを整理しています。

また、15の分析手法について、実際に実践していただけるよう、具体的な手順とアプトプットイメージを示しつつ、詳細に紹介しています。

(2) 仮想実施事例

過去の革新的な事業変革を題材に、公開情報に基づいて分析を行い、仮想実施事例を作成しました（一部、仮定の情報をおき、分析を実施）。IPランドスケープにおける、目的の設定、分析、経営層への報告という全体の流れを把握いただけます。

3. おわりに

本ガイドブックがIPランドスケープを実践する皆様の一助になれば幸いです。



<https://www.jpo.go.jp/support/example/ip-landscape-guide/>

		分析手法例																
		俯瞰・可視化					時系列整理		領域の評価			企業抽出・評価			潜在的要素の顕在化		キーパーソンの特定	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		
IPランドスケープ実施の目的	事業戦略	共通	①技術・プレイヤーのトレンド分析	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
		既存事業	②企業の強み/弱みの整理	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
			③新規顧客の探索															
	新規事業	④新規用途探索									●	●						●
		⑤有望新規領域探索	●	●	●		●	●	●	●	●	●			●			
	技術開発戦略・知財戦略	⑥想定競合企業の抽出			●		●		●		●	●	●	●				●
		⑦出願を注力すべき領域の特定	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		⑧自社の知財上のリスクの洗い出し				●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		⑨特許活用先の探索			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
		⑩パートナー候補企業の抽出	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	パートナーング	⑪パートナー候補企業の技術力・知財力評価					●							●				●
		⑫自社とパートナー企業との想定シナジー評価					●							●				●
	活動の外部向け可視化	⑬CGC対応	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

IPランドスケープの目的と分析手法例

手法 1. 出願数に基づく技術開発状況の可視化

技術開発状況の可視化方法としては、出願年・技術領域・用途・解決する課題等のデータを使用し、二軸バブルチャート等を用いて出願動向を可視化することが有効である



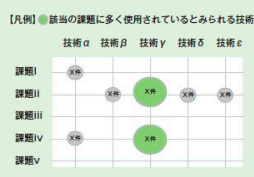
- 母集合の抽出 (図1)
 - ▶調査対象とする技術領域、企業・国・地域、発明者等の特許出願を母集合として抽出する。
 - 特許検索ツールで、検索式をたて、調査対象となる特許出願を抽出する。抽出した文庫を、リスト化する。
 - 特許出願を抽出する際に、基本的な書誌事項、請求項の内容、明細書における課題・用途等を情報として取得しておく。Step2の作業がスムーズになる場合がある。
- 例として下記のような軸にてリスト化した文庫を整理する。
 - ▶出願年
 - ▶出願人
 - ▶出願国・地域
 - ▶技術領域*
 - ▶用途*
 - ▶解決する課題*
- 2つの分類軸のかけあわせにより、各領域における出願の多寡を整理し、下記のような点を考察する。
 - (例)
 - ▶技術×課題のバブルチャート:各課題を解決するために、どのような技術が使用される傾向にあるか。(図2)
 - ▶技術×出願人国籍のグラフ:各技術領域においてどのような国・地域の企業の開発/出願が活発か。
 - 上記の整理方法のほか、1つの分類軸によるランキングマップ、シェアマップ等の作成も可能である。

図1: 母集合となる特許リストの例

#	出願番号	特許分類	企業	請求項	発明が解決する課題 (原文)	...
1	XX	XX	XX	XX	XX	XX
2	XX	XX	XX	XX	XX	XX
3	XX	XX	XX	XX	XX	XX

*作業では、付与されている特許分類等を活用できる。また、各文庫を積み込み、各文庫に独自に作成した分類を付与することで、独自の観点で整理することができる。その際には、テキストマイニングを使用することも可能である。

図2: 技術×課題のバブルチャート



分析手法の具体的な手順